

愛着スタイルが外傷体験の意味づけに及ぼす影響

— 複線径路・等至性モデルを用いて —

岡 田 貴 恵

外傷体験に対する意味付けやそこから心的外傷後成長に至る過程がそれ以前に保持されていた愛着とどのように関係しているのか、また外傷後成長を体験することによってその愛着スタイルがいかに変化するのかについて検討することを目的とする。本調査は、自身に影響を与えた対人関係に関する傷ついた体験を経たことのある近畿圏のA大学における大学生・大学院生3名を対象に質問紙調査と半構造化面接を行い、面接調査の結果はサトウ他（2006）が提唱した複線径路等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：TEM）を用いて分析を行った。

その結果、幼少期の愛着スタイルについて着目すると、3名それぞれが幼少期のエピソードについて語り、それぞれに愛着の形成の危機となるような体験が存在していた。そして、傷つき体験を経験した際、2名は、周囲の人に頼らず自分に体験を落としこむ、納得させるという語りが見られた。一方1名は、自傷行為という点からは傷つき体験との直面化を回避しようとする行動を起こしていると言えるが、後に周囲の人に話を聞いてもらい、頼ることができたという語りが見られた。この点から、3名はそれぞれ傷ついた体験をし、その苦痛ある体験に対する対処の方法に違いが見られた。そして、傷つき体験についてポジティブな経験であったと意味付け、他者との関係に焦点が当てられた外傷後成長がおきていることも語られた。

以上から、幼少期の愛着スタイルについて着目すると、傷つき体験以前に保持されていた愛着スタイルは、外傷体験に対する意味付けやそこから心的外傷後成長に至る過程に大きく影響していることが分かる。また、傷つき体験後の語りでは、3名とも、周囲の人に支えられたと感じ、自分自身についての気づきを得られたことが分かった。そして、傷つき体験についてポジティブな経験であったと感じ、他者との関係に焦点が当てられた外傷後成長が起きていることも分かった。3名とも、外傷後成長を体験することで、傷つき体験をする以前に保持されていた愛着スタイルに大きな変化が見られた。以上から、外傷体験に対する意味付けやそこから心的外傷後成長に至る過程は、それ以前に保持されていた愛着スタイルが大きく影響していることが分かり、また、外傷後成長を体験することによってその愛着スタイルは、不安定な表象に向うのではなく、安定な表象に向うということが説明できるのではないか。